

伊藤信孝

チェンマイ大学工学部・客員教授

本報では海外事務所設置について記述する。国際交流事業の拡大に伴い、連絡を蜜にすると共に、より一層の事業展開を推進するのが目的である。しかし海外事務所を設置したその日から開店休業となる事務所が多いのも事実のようである。ホームページやウェブに海外事務所設置と誇らしげにアップロードされている中のどの程度がその事務所を利用して本来の目的に沿った活動を展開しているかは疑問である。一説によれば 100 ほどの大学が海外事務所を開設しているが機能しているのはわずか 40%ほどと言う。この数字は定かなものではないが何となく頷ける。もちろん大学によっては積極的に常駐の職員を派遣し、本来の目的に沿った活動を行っている大学も有ることはわかるが、その割合があまりにも少ないため驚きも感じなければインパクトを与えない。海外事務所を設置して如何にも活発に国際交流事業を展開しているかの如きジェスチャーを見せることで、本来の目的を達成したと誤解しているのではないかと目を疑う。さらに不可思議なことは、教員が学生たちを引率して近くまで来ていても協定相手大学に立ち寄らずに帰るなどという考えられない光景も時には目にする。「一体どうなっているの」という言葉が口から出る。せっかく相手の協定大学と相談合意して解説した事務所なら、設置に際しそれなりの目的と役割があったはずである。それともはじめから常駐職員はゼロとの設定で合意に至ったのかもしれない。開店休業では意味が無い。素早く常駐の職員を派遣し本来の目的に沿った業務を果たすという重要な部分が抜けている。なぜ職員が常駐しないのかと言う理由はいくつか考えられる。その幾つかは次のようであろう。すなわち 1) 希望者が居ない、居ても条件が合わないので行きたがらない、2) 派遣して長期滞在させるだけの予算的措置ができない、3) 条件に合う能力を備えた人材が見つからない、など上げればきりが無い。しかし上記の理由は事務所設置以前に検討し、準備した上で設置にとりかかるのが手順ではなかろうか。永らく来ていないので事務所がどうなっているか見に来たという頓珍漢な大学もあると聞く。相手大学はよほどのことがない限り、無理してまで何も言わない。何も言わないという合意まで含まれていたかどうかは別にして。使いもしない部屋を確保して置く事自体相手機関に対しても失礼である。ではどうすればよいかであるが、基本的に事務所を有効に利用してこそ本来の目的に沿った対応と考えられるから、利用すること、稼働率を上げてそれなりの実績を示すことである。常駐職員の能力的資格としては日本語、英語ができることが先決である。本人がその職務を好み積極的に働く意思があること。職務と組織の内容を理解し、両大学あるいは機関にとって有益、かつ効果的であること、その前提条件としてコミュニケーション能力と相手機関との良好な関係を育成維持できることが重要である。例えばかつての留学生で所定のプログラムを終えて帰国した卒業生（同窓

生)でも探せば可能である。若い世代が難しいなら定年退職者はどうか。言うまでもなく上記に沿った能力が求められるが、年金生活が前提の収入を得る必要が無く、半ばお役に立ちたいという気持ちを持ち合わせた人材の発掘が好ましい。高望みして JICA レベルの処遇条件での派遣を望むのなら、それはやめた方がよい。基本的に両大学にとって良好で、かつ相互に利益をもたらす、半ばボランティア的な寛容性が必要である。派遣職員が原因で関係が悪くなるというのでは何がための事務所設置か疑わしくなる。チェンマイには定年退職した後の年金を糧に在住する人が登録した人だけでも 3000 人はいると言われる。なかなか条件に合う人材の発掘は難しいと思われるが、まずは真剣に探す努力が必要である。派遣に要する経費としては、主に食費、宿泊費、諸手当（基本的に毎月の給料に相当）という形に分類されるが、日本での雇用と同じでなければダメと言っている人は真っ先に除外したほうが賢明である。詳細な内訳の記載については、ここではご容赦願いたい、大雑把に言って年間 250 万円で十分足りるのではないかと試算している。また派遣先大学が「報告兼打ち合わせ」という名目で年に 2 回の一時招聘帰国を負担すれば一層被派遣者の自己負担が軽減することになる。筆者は「貴方が来てくれて、本当に助かっている、大変ありがたい、世話になった」とお世辞でもいいから言われる程の貢献ができればと心して頑張っている。また、このような形の国際交流の方法もある」と言う善き例を作るのも目標の一つである。感動に飢えた若い世代の学生に如何に感動し、生きる意義と勇気が与えられるか、感動させられないのは努力不足であり、プログラムに魅力がないからだ」と言い聞かせて絶えず自問している。もういい加減「見せかけの国際交流」は辞めにすべきである。数だけの実績作りはやめにして、誠実に、また真剣で自ずから正直で素直に、心から感謝し、詫げる事ができる大らかなマインドのある対応が常に必要であることを旨としたい。